

無意識の宝

——『金の毛が三本ある悪魔』（KHM 29）の深層心理学的解釈——

梅 内 幸 信

1. 同毒療法

人間は、体調を崩し病気になったとき、薬を飲むが、その薬の中には、単なる栄養剤の他に、往々にして少量の毒薬が含まれている。人間の体内の免疫力が低下したとき、再び元の調和を取り戻す刺激剤として、少量の毒を摂取するのである。言うまでもなくこの毒は、間違っても摂取しすぎると人間は、副作用を引き起こしたり、最悪の場合には死にかねない。このような医療的考えは、「同毒療法」¹と呼ばれる。この療法の根本的原理を考察してみると、もともと正常な人間の細胞組織が体内の調和を失い、病気になったとき、再び元の調和を取り戻すために、逆に病気の状態を引き起こす物質、つまり本来の健康時に摂取すると、その病気と同じ病状を引き起こす物質を取り入れる必要があるということを意味している。このことは、病気の状態が、本来の健康状態と較べてマイナスの状態であるとすれば、プラスの健康状態へ引き戻すために、マイナスの状態を引き起こす毒を加えるという手続きを意味している。数学的にも、マイナスにマイナスを掛けると、プラスになる。ここで用いられる毒薬は、本来人間の細胞組織にとって有害なものであるが、病気という危機的状況にあっては、むしろ病気に対する抵抗力と免疫力を喚起・増進し、健康状態を取り戻す刺激剤の働きを持っている。ただし、このような手続きを取るにしても、人間の体の免疫力ないし生命力が完全に機能しない場合には、この手続きも効力のないものになってしまう。心臓停止の状態になって、最後の手段として電気ショックを与えても、心臓が再び動き出すことがなければ、人間の力で救命は不可能となる。

同毒療法と呼ばれる治療法の原理は、人間の細胞組織ばかりではなく、人間の社会組織にも働いていると思われる。社会が合理的に組織立てられ、それが時の経過とともに、あまりにも合理的になり、非人間的にして病的な徴候を帯びるとき、社会は自己治癒の手段として、マイナス要因である悪を呼び寄せるのであろう。たとえば、原子力発電にしても、これは本来人間社会にとって非常に役に立つものである。しかし、科学者が安全対策や管理を怠り、良心を忘れ、利益追求のみに走るとすれば、社会は病的状態に陥り、健康を取り戻すために、マイナス要因である原発事故をもたらすと考えられる。思うに、地震も津波も、そして台風も、自然が本来あるべき調和を回復するために引き起こされるものであると考えられる。このような同毒療法と呼ばれる治療法の原理は、グリム童話の中にも見出される。それは、『金の毛が三本ある悪魔』（KHM 29）である。そもそも童話ないし昔話は、決して個別の出来事から生まれる物語ではなく、時を超え、空間を越えて人間の無意識の中から生まれ出るものであるからして、それは極めて普遍的な特徴を帯びている。童話の

¹ 同毒療法は、同種療法（ホメオパシー）とも呼ばれる。由井寅子『ホメオパシー in Japan』ホメオパシー出版、2006年（第9版）、14-22ページ参照。グンペルト、マルチン『ハーネマン』由井寅子監修、熊坂春樹訳、ホメオパシー出版、2006年、180-198ページ参照。

知恵は、² 民族を超え、時代を超えて、あらゆる人間に働きかける。また童話は、その物語の魅力的な筋によって人間の心を捉える。それゆえ人間は必然的に、童話に耳を傾けざるをえないのである。

グリム童話に注釈を加えたボルテとポリーフカに拠れば、『金の毛が三本ある悪魔』は、次のように7つのモチーフに分けられる。³

- A¹ : 赤子が、その将来の舅によって迫害されること、
- A² : 娘との結婚を命じる裏切りの手紙がすり替えられること、
- B : 舅は、悪魔（巨人、龍、鳥）の毛3本を取ってくるために、主人公を旅に出すこと、
- C : 出会う人々が主人公に問いを課すこと、
- D : 怪物の女房が主人公をかくまい、主人公に3本の毛と回答を入手させること、
- E : 主人公が報酬を受け取ること、
- F : 主人公が王の娘と結婚すること、
- G : 舅は、同じ道を辿って、渡し守と仕事を交代させられること。

さらに、『金の毛が三本ある悪魔』は、カッセル近郊のツヴェールンから採集された話で、1819年に出版された第2版においては29番目の話として収録されている。⁴ また、ボルテとポリーフカの注釈に従えば、『金の毛が三本ある悪魔』にはこの他に2つの類話が存在していると言われる。

それは、75番目の『フェニックス鳥』（マイン地方の、カッセルにあるヴィルト家のマリー）[Marie]から、1812年2月10日採集）と29番目の『金の毛が三本ある悪魔』（ニーダーヘッセンから、鼻かみ[Schneuz dich; 鼻をかめ！]マーレ[Male]、おそらくカッセルのアマーリエ・ハッセンンプルーク[Amalie Hassenpflug]から、1812年秋に採集）である。最初の話は、全体として筋が一致しているが、しかし、遥かに不完全である。悪魔がそう呼んでいるフェニックス鳥の3枚の羽が探し出されるだけである。⁵

² 「民族の知恵」は、「民族の記憶」とも言い換えられる（小澤俊夫『昔話入門』日本経済新聞社、2002年、101-102ページ参照）。

³ Vgl. Johannes Bolte / Georg Polivka: *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*. 4 Bde. Georg Olms Verlag, Hildesheim · New York 1982, 1. Bd., S. 276-293. これら7つのモチーフの順列組み合わせによる様々な類話の分布に関しボルテとポリーフカは、詳細に説明している（vgl. Johannes Bolte / Georg Polivka: ebenda, S. 282-293）。

⁴ Ebenda, S. 276. 小澤俊夫『グリム童話考』講談社、1999年、109-110, 120ページ参照。

⁵ Ebenda. 『フェニックス鳥』は、そのモチーフに関し、『金の毛が三本ある悪魔』と比較・考察してみる価値があるので、今後のグリム童話研究のために、以下に訳出しておく（Johannes Bolte / Georg Polivka: a. a. O., S. 277f.）。<あるとき一人の金持ちが、川のそばを散歩していると、一つの小さな箱が流れて来ました。金持ちがこの箱を掘り上げ、ふたを開けると、そこには小さな子どもが入っておりました。金持ちは、この子を家に連れ帰り、育て上げました。しかし領主は、この子を好きになれませんでしたので、あるときこの子連れ、川の舟に乗り込みましたが、小舟の中央に来たときに、急いで小舟から飛び降り、子ども一人を小舟に残しました。こうして小舟は、どんどん流れて行き、水車小屋に流れ着きました。すると、そこで粉屋がこれを見ていて、子どもを可哀そうに思い、子どもを拾い上げて、自分の家で子どもを育てました。しかし、あるとき偶然、領主がこの水車小屋にやって来て、この子に気づき、連れて行きました。その後まもなく領主は、この若者に自分の妻に宛てた一通の手紙を預けました。そこには、「この手紙を届けた者を即座に殺すべし」と書かれてありました。しかし、途中森の中で若者は、一人の老人と出会いました。この老人は、若者に「手に持っている手紙をわしに見せるのじゃ！」と言いました。こうして老人は手紙を受け取り、それを一度だけひっくり返して、それを再び若者に返しました。すると、そこには、「手紙を届けた者に、即刻わしの娘を妻として与えよ」と書かれてありました。この通りのことが実行されました。そして、領主がこれを聞くと、怒って、「ふん、そうたやすくはゆかんぞ。わしの娘をお前にやる前に、まずフェニックス鳥の羽を三枚わしに取ってこい」と言いました。

若者は、フェニックス鳥を探しに出かけ、森の中の例の場所に来ると、再びあの老人に出会いました。老人は、「一日中歩

もう1つの類話は、かなり『金の毛が三本ある悪魔』に近い話ではあるが、しかし、いくつかの重要な項目に関し相違点が見られる。そこで、これら2つの話の相違点を表にして、以下に提示する。

『金の毛が三本ある悪魔』と類話との相違点

項目 \ 話	『金の毛が三本ある悪魔』	類 話	備 考
1. 主人公	福の子。	木こり。	類話では、美男子の木こり。
2. 姫の父親	王。	領主 (Verwalter)。	類話では、領主。
3. 共通しない課題	なし。	とある町の姫の病気を治して欲しい。	類話における最初の課題は、『金の毛が三本ある悪魔』にはない。
4. 第1の課題	市場の井戸から元のようにブドウ酒が湧き出るようにして欲しい。	涸れた井戸に元のように水を溢れ出させて欲しい。	類話の方では、単なる水。
5. 第2の課題	リンゴの木に元のように金のリンゴをならして欲しい。	枯れたイチジクの木に、元のように実をならして欲しい。	類話の方では、イチジクの木。
6. 第3の課題	渡し守がだれかに仕事を交替してもらいたい。	漁師が渡し守の仕事を交替してもらいたい。	類話の方では、漁師。
7. 悪魔の世話人	お婆さん。	女房。	1世代の開きがある。
8. 褒美	第1と第2の課題解決のお礼に、それぞれ金の袋を積んだ口バ2頭をもらう。合計、袋は4袋。	第3の課題解決に対して、歩兵1連隊をもらう。第2の課題解決に対して、騎兵1連隊をもらう。第1の課題解決に対して、金を山積みにした馬車4台をもらう。	木こりは、場合によっては王に対し、実力行使に出る用意がある。

ボルテとポリーフカの注釈には、これら2つの話の間に「わずかな食い違い」しかないとする、次のような記述が見られる。

き続けるのじゃ！ 晩になるとお前は、一本の木にぶつかるじゃろが、その上には二羽のハトが止まっておってな、そのハトたちが行き先をお前に教えてくれるじゃろよ」と言いました。晩になって若者がその木の所に来ると、その上に二羽のハトが止まっておりました。一方のハトが、「フェニックス鳥の所に行きたい者は、一日中歩き続けねばならない。歩き続けると、晩には門に着く。その門は閉まっているけれど」と言いました。もう一羽のハトは、「この木の下に金の鍵がある。その鍵で門は開く」と言いました。こうして若者は、鍵を見つけ、それで門を開けました。門の後ろには二人の男たちが座っていて、一方の男が、「フェニックス鳥を探す者は、高い山を超えて、長い道のりを行かなくてはならない。その道の果てでお城に入ることができる」と言いました。

三日目の晩になると若者は、ついにお城に辿りつきました。すると、そこには白衣の料理女が座っていて、「あなたは、ここで何のご用があるのですか？」と訊きました。——「あのオ、僕はフェニックス鳥の羽を三枚欲しいのです」と、若者は言いました。料理女は、「命を失いますよ。と申しますのも、もしフェニックス鳥があなたを見つけましたら、あなたを丸ごと平らげておしまいになるでしょう。けれど、あなたにその羽を三枚取って来れるか試してみましょう。フェニックス鳥は、毎日ここへやって来ます。そのとき私は、目の細かな櫛でその羽をすいてあげなくてはならないのです。早くこの食卓の下へ隠れなさい！」と言いました。その食卓の四方は、布で覆われていました。

そうこうする間にフェニックス鳥が家に戻って来て、食卓の上に舞い降りると、「臭う、人の肉の臭いがする」と言いました。——「なんということを、だれもここにいないことは、あなたが十分ご承知でしょうに」と、料理女は言いました。——「さあ、俺の羽をすいてくれ」と、フェニックス鳥は言いました。白衣の料理女がフェニックス鳥の羽をすいていると、フェニックス鳥は眠り込んでしまいました。フェニックス鳥がぐっすり眠り込むと、料理女は一枚の羽をつかんで、それを引き抜いて、食卓の下へと投げ込みました。すると、フェニックス鳥は目を醒まして、「なんでお前は、俺から羽をむしり取るのだ？ 俺は、人間がやって来て、俺の羽を一枚むしり取る夢を見たぞ」と言いました。しかし料理女は、フェニックス鳥をなだめ、こうしたことが二度、三度繰り返されました。

羽を三枚手に入れたところで若者は、それを持ってわが家へと帰り、花嫁をもらい受けました。>

1812年の、もう1つの記録には、この童話の後半部のみが含まれていて、あるお姫さまが1人の木こりに恋をするが、その父親は、その若い木こりが悪魔の金の毛を3本取って来ないと、結婚を認めない、という導入部が付けられている。さらなる展開では、最初に課される2つの問いにおいて、わずかな食い違いが見られる。答えを出すと木こりは、褒美として金の他に歩兵1連隊と騎兵1連隊をもらう。これによって木こりには、年老いた王さまにその約束を守らせるのである。⁶

⁶ Johannes Bolte / Georg Polivka: a. a. O., S. 278. この類話も、今後の比較研究のために、ここに訳出しておく。

ある一人の木こりが、王さまの館の前で木を切っていました。上の部屋の窓のそばにお姫さまが立って、木こりを眺めておりました。お昼になると木こりは、木陰に座って、休憩しようと思いました。そのときお姫さまは、その木こりがとても美男子であることが分かったと、木こりにほれ込み、木こりを部屋へ呼ばせました。木こりは、お姫さまを見ると、お姫さまが美しいことが分かったので、木こりもまたお姫さまにほれてしまいました。こういうわけで二人は、間もなくその愛で一心同体となりました。しかし王さまには、お姫さまが木こりを愛しているということが、こっそり伝えられました。このことを王さまが聞き及ぶと王さまは、お姫様の所に行き、「お前は、悪魔の頭に生えている金の毛を三本取って来た者が、それが王子であろうと木こりであろうと、お前の花婿になるということを知っておろうな」と言いました。しかし王さまは、「そんなことができるほど勇敢な王子などいた試しがないし、ましてや出来の悪い木こりにそんなことができるわけがない」と考えておりました。お姫さまは、悲しみに暮れました。といいますのも、悪魔の金の毛を三本取ろうとして、すでに多くの王子が命を落としていたからです。しかし、それ以外には方法も無かったものですから、お姫さまは、父親の言ったことを木こりに打ち明けました。木こりは、まったく悲しみもせず、「もう成功間違いなしさ。僕が戻って来るまで、僕を信じて、待ってね！明日早朝、僕は旅に出るから」と言いました。

こうして木こりは、悪魔の所に向かって旅に出かけ、やがてある大きな町にやって来ました。市門の前で見張りが木こりに、どんな仕事が出来て、何を知っているかを尋ねました。「僕は、なんでも知っている」と、木こりは答えました。「お前がなんでも知っているのなら」と、門番は言いました。「私たちのお姫さまの病気を治してくれ。世の中のどんな医者も、その病気を直せないのだ！」——「僕が戻って来たときにね」と、木こりは言いました。二番目の町でも木こりは、何を知っているのか尋ねられました。「なんでも知っている」と、木こりは答えました。——「それでは、なぜ私たちの市場の素晴らしい井戸が涸れたのか教えてくれ！」——「僕が戻って来たときにね」と、木こりは言って、そこに長居はしませんでした。やがて木こりは、枯れそうになっているイチジクの木のそばにやって来ました。そのとなりに一人の男が立っていて、木こりに何を知っているのか訊きました。「なんでも知っている」と、木こりは答えました。——「それじゃ、なぜそのイチジクの木が枯れて、実をならせないのか教えてくれ」と、その男は尋ねました。——「僕が戻って来たときにね」と、木こりは言いました。木こりは、さらに旅を続け、ある漁師の所にやって来ました。漁師は、木こりを向こう岸に渡す仕事をしていましたが、木こりに何を知っているのか尋ねました。「なんでも知っています」と、木こりは答えました。——「それじゃ、いつわしが仕事を交替してもらい、だれか他の人が人々を向こう岸に渡すことになるのかを教えてください」と、漁師は訊きました。——「僕が戻って来たときにね」と、木こりは言いました。

向こう岸に渡った後に木こりが地獄に入ると、そこは真っ黒で、すすだらけに見えました。しかし、悪魔は家におらず、その女房だけがそこに座っておりました。木こりは、悪魔の女房に「こんにちわ、奥さん」と言いました。「僕がここに来たのは、あなたの旦那さんの頭に生えている金の毛を三本欲しいからなのです。それに、なぜお姫さまの病気が治らないのか、なぜ市場の深い井戸が涸れ、イチジクの木に実がなくなっただのか、その訳を知りたいのです。」女房は驚いて、こう言いました。「悪魔が戻って来て、あんたがここに居るのに気づいたら、あんたをすぐさま平らげてしまいますよ。金の毛を三本なんて、二度と手に入れられないでしょう。でも、あんたがまだそんなに若いので、あんたを気の毒に思うから、助けてあげられるかどうか試してみましょ。」——木こりは、ベッドの下に隠れなくてはなりませんでした。ちょっとした間そこに居るかいなうちに、悪魔が家へ帰って来ました。「おい、今帰ったぞ」と、悪魔は言って、着ているものを脱ぎ始め、「この部屋はおかしいぞ！臭う、人の肉の臭いがする。調べてみなくちゃな」と言いました。——「何の臭いがするって言うのさ」と、女房は言いました。「鼻を鳴らしたりしてさ。あんたの鼻には、いつだって人の肉の臭いがこびりついているんだから。物をごちゃごちゃにしないでよ。たった今掃除したばかりなんだから。」——「おとなしくすりゃいいんだろ。今晚、俺は疲れた。お前も、口に入れる餌をくれそうにもないし。」

そう言って悪魔はベッドに入り、女房は悪魔と向き合って横になりました。間もなく悪魔は眠り込み、初めに喉を吹き鳴らし、続いていびきをかき始めましたが、最初はおとなしく、それから窓が震えるほどに大きないびきをかき始めました。悪魔がぐっすり眠り込んだことが分かったと女房は、三本の金の毛がうちの一本をつかんで、それを引っこ抜き、ベッドの下にいる木こりへ投げてやりました。悪魔は飛び起きて、「おい、何をしようってんだ！何で俺の毛を抜くんだ？」と怒りました。——「あのね、あたしは悪い夢をみたの。それで、怖くなってそうしちゃったのよ」と、女房は言いました。——「いったい、どんな夢を見たんだ？」と、悪魔は訊きました。——「瀕死の病に罹っているお姫さまの夢だったの。この世のどんな医者さまも治せないって」と、女房は言いました。——「なんでそいつら、ベッドの下にいる白いスズガエルを片付けないのかな」と、悪魔は答えました。こう言って悪魔は、寝返りを打ち、また眠り込んでしまいました。女房は、悪魔のいびきを聞くと、二番目の金の毛をつかみ、それを引っこ抜いて、ベッドの下へ投げ入れました。悪魔は、飛び起きて、「おい、なんてことすんだ！お前は気でも狂ったのか！」と、叫びました。「ねえ、あんた、あたしは市場の大きな井戸の前に立っていたの。そしたら、水が涸れたと言って人々が泣いていたの。それで、助けてあげることはないかと、ひそかに思ってね。中を覗くと、井戸はとっ

しかしながら、筆者としては、項目4の「ブドウ酒と水」、項目5の「リンゴの木とイチジクの木」、項目7の「お婆さんと女房」の食い違いは、決して「わずかな食い違い」とは思われたい。そこで、本論において『金の毛が三本ある悪魔』に見られるイメージ・シンボルを手掛かりとして、深層心理学の手法によって解釈を試み、とりわけ「三本の金の毛」の具体的意味の解明を試みたい。

2. 『金の毛が三本ある悪魔』(KHM 29)

童話に登場する王は、そのイメージとシンボルが表すように「人とその心とを治める原理」⁷を具

ても深く、めまいを感じるほどだったの。それでね、身を支えようとしたとき、あんたの毛をつかんでしまったのよ」と、女房は言いました。「おめえはな、その下にある白い石を取り出せて、あいづらに言うだけでよかったんだぜ。がなア、おめえの夢などどうでもええ！」と、悪魔は答えました。悪魔は、再び横になり、前と同じように、ぞっとするようないびきをかき始めました。女房は、「もう一回思い切ってやらなくちゃ」と考え、三本目の金の毛を引っ抜き、それをベッドの下へ投げ入れました。——悪魔は、高く飛び上がり、ひどい目に合わせようとしたが、女房は悪魔をどうにかなだめ、キスして、こう言いました。「ひどい夢だったの。一人の男が、あたしに枯れようとしているイチジクの木を指差して、実がならないと言って、悲しんでいるの。それであたしは、実が落ちてくるかも知れないと思って、木をゆすってみたら、そのときあんなの髪の毛をゆすってしまったのよ。」——「そりゃア、むだなこった。根っこをネズミがかじっているのさ。そいつを殺さなきゃ、木は枯れるぜ。いったん木が死んだら、もう二度と再び葉もはえねえし、実も結ばねえよ。がなア、もうこれ以上おめえの夢のことで、俺を苦しめねえでくれ！俺は、眠りでエェんだ。もう一回俺を起こしたら、そのときアおめえにびんたくらわすぞ」と、悪魔は答えました。——女房は、悪魔の怒りで心配になりましたが、哀れな木こりは、悪魔しか知らないことを聞き出さなければならぬのです。そこで女房は、悪魔の鼻をつまんで、宙へと引っ張り上げました。悪魔は、恐ろしいほど飛び上がって、女房にびんたをくらわせましたので、その音が部屋中に響き渡るほどでした。女房は、泣きながら、こう言いました。「あたしが水の中へ落ちてもいいの？ 漁師がね、あたしを大きな川を渡して、小舟が向こう岸に着くと、その漁師が怒り出したのよ。それであたしは、川に落ちそうになって、鎖が打ちつけられている丸太にしがみつこうとしたら、あんなの鼻をつかんでしまったの。」——「なんでおめえは、気をつけなかったんデエ？ 小舟でエのは、いつだって揺れるもんだ」と、悪魔は言いました。——「漁師が、だれも来ず、わしと交替してくれない。わしの仕事は、いつまでたっても終わらないって、あたしに喋って言ったの」と、女房は言いました。——「そいつア、最初に来た者を引き留めて、そいつと交替してくれる三人目が来るまで渡し続けるのさ。そうすれば、そいつア救われるぜ。それにしても、おめえは変な夢を見るなア。船頭について言ったことも本当だし、他のことも本当だぜ。もう二度と俺を起こすな！ じきに夜が明ける。俺は、まだ眠りたいんだ。さもないアア、おめえをはつ倒すぞ。」

さて木こりは、一切を聞き知り、悪魔が再びいびきをかき始めましたので、悪魔の女房にお礼を言い、旅を続けました。木こりが漁師の所に来ると、漁師は答えを求めました。「まずは僕を向こう岸に渡してくれ！」と、木こりは言いました。向こう岸に着くと木こりは、漁師にこう言いました。「向こう岸に渡りたいと言う最初の者が来たら、その人を引き留め、もう一人の者が来て交替するまでその仕事を引き受けさせるのさ！」その後木こりは、実のならないイチジクの木の下にいる男の所にやって来ると、男にこう言いました。「根っこをかじっている白いネズミを殺しさえすりゃいいのさ。そうすれば、木はもとのように実をならせるさ。」——「褒美に何が欲しいかね？」と男が訊くと、木こりは「歩兵一連隊欲しい」と答えました。そして、木こりがこう言うやいなや、一連隊の歩兵が木こりの後ろから行進して付いて来ました。木こりは、うまく行っただと考え、市場の井戸が涸れた町に入ると、「井戸の底にある白い石を取り出せ！」と言いました。すると、一人の者が井戸に降りて行って、白い石を取り出し、その者が上に来るか来ないうちに、井戸は再びこの上もなく澄んだ水で溢れ出しました。「どうしてお前さんに報いたらよいか」と、市長が木こりに尋ねました。「僕に騎兵一連隊ください！」と、木こりは言いました。——すると、木こりが市門から出ると、後ろから騎兵一連隊も付いて来ました。——こうして木こりは、お姫さまが病気で寝て、どんな医者もその病気を治すことができないでいる町へやって来ました。「寝たの下に隠れている白いスズガエルを殺しさえすればいいのさ！」実際、このことが実行に移されると、お姫さまの病気は回復し、元気になり、頬にも赤味がさしてきました。「褒美に何が欲しいかのう？」と、王さまが尋ねました。「金を積んだ馬車を四台ください」と、木こりは言いました。

とうとう木こりは家に帰り、木こりの後ろからは歩兵一連隊と騎兵一連隊、金を山積みされた馬車四台が付いて来ました。金の毛三本は木こり自身が身に付けていました。木こりは、お伴の子どもを城門前で待つよう命じました。しかし、木こりが城内から合図を出したら、すぐさま行進して入るよう命じたのでした。この後木こりは、自分の愛するお姫さまとその父親の前に進み出て、父親に悪魔の金の毛三本を差し出して、約束通りお姫さまを妻としてくれるよう父親に願い出ました。王さまは、びっくりし、「金の毛三本については、その方の言う通りじゃが、姫については心配なことがある」と言いました。木こりがこれを聞くと、窓から合図の口笛を鳴らしました。すると、突如として城門を通して歩兵一連隊と騎兵一連隊、金を積んだ馬車四台が行進して入って来ました。「王さま」と、木こりは言いました。「ご覧ください。これが、僕の連れて来た家来どもです。それに、馬車には僕の財産が載っています。四台の馬車は、金でいっぱいです。さあ、僕にお姫さまをくださいますか？」王さまは、驚いて、こう言いました。「いいとも、心から喜んで。」こうして、二人は結婚し、幸せに暮らしました。

> (Johannes Bolte / Georg Polivka: a. a. O., S. 278-282.)

⁷ フリース、アト・ド『イメージ・シンボル事典』山下主一郎他訳、大修館書店、1988年、373ページ。以下、この事典からの引用については、ISと略記し、本文引用末尾にページ数のみを付す。

現する人物である。ところが、この王は悪徳の王で、⁸ある村で「十四歳になれば王の娘を妻に迎える」⁹というお告げを受けた「福の子」(S. 167)の噂を聴き付けると、このお告げに腹を立て、その両親を金貨で誘惑し、親切を装い、その福の子をもらいうける。その際、この「意地悪な」(S. 167)王は、「あなたがたは貧しいようですから、この子を私に預けてください。よく面倒を見てあげますから」(S. 167)と言って、まったく心にもない嘘をつく。この王は、意地悪なうえに、平気で嘘をつく悪人である。「嘘をつくこと」は、見かけ以上に罪深い。その根源には、虚栄が潜んでいる。従って、このような王が治める王国も、決して健全な王国でないことが自ずと判明する。

王は、もらいうけた福の子を、箱に入れて、川の中へ投げ込んでしまう。しかしながら福の子は、粉屋の若者に助けられ、子宝に恵まれていなかった粉屋の夫婦にもらわれ、この夫婦によって育て上げられる。それから14年経ち、王が嵐に遭い、たまたま粉屋の夫婦の水車小屋へ避難する。そこで王は、14歳になった福の子に再会する。自分が箱に入れ、川に投げ入れて殺したと思った福の子がまだ生きていると知った王は、褒美に金貨2枚あげるので、福の子に手紙を城にいる妃に届けて欲しいと夫婦に頼む。夫婦は、王の命令に従って、福の子に手紙を城にいる妃に届けさせる。しかし、その手紙には、「手紙をもった少年が到着したら、その少年を殺して埋めよ。また、ことの一切は、わしが戻る前に片づけよ」(S. 168)と書かれてあった。福の子は、手紙を持って旅に出る。「旅に出ること」は、「新しい出発、人生の転換、未知への挑戦」、¹⁰あるいはH. v. バイトの言うように、「交互に起こる事件において見られる内的発展の過程」¹¹を意味している。

その旅の途上、道に迷って、大きな森に迷い込んでしまう。夜中に森の中の小さな家に泊めてもらうことになるが、その家は「盗賊の住みか」(S. 168)であった。幸い、その家にいたお婆さんが福の子を助けてくれる。家に帰ってきた盗賊たちは、福の子が携えていた手紙を読み、福の子に同情する。すると盗賊の首領は、「この少年が到着したら、すぐさま姫と結婚させよ」(S. 168)という内容の手紙に書き変えてしまう。こうして福の子は、無事城に辿り着き、これを受け取った妃は、その手紙に書いてあった通りに、福の子と自分の娘を結婚させる。しかも、物語においてこの福の子と結婚させられた姫に関して、「少年は立派で親切でしたので、姫はこの若者と楽しく、満足して暮らしました」(S. 168)と語られている。

王が城に戻り、自分の手紙が途中ですり替えられ、そのせいで福の子が自分の娘と結婚していることに気づくと、自分の所業の非を悟るところか、カンカンに怒り、往生際も悪く、福の子に次のような、当初から不可能と思われるような試練を課するのである。

「そうたやすくは行かんど。わしの娘を妻にしておこうと思うなら、地獄にいる悪魔の頭か

⁸ この悪徳の王は、最後には罰を受ける。この王の後継者となるのがこの童話における主人公「福の子」で、貧しい夫婦の子から様々な試練を乗り越えて姫を獲得し、王となる。その過程は、いわゆる「自己実現」の過程と見なすことができる(リュウティ、マックス『昔話の本質と解釈』野村法訳、福音館書店、1996年、190-195ページ参照)。

⁹ Vgl. Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. 3 Bde. Band 1. Reclam. Stuttgart 1980, S. 167. 以下、このメルヒェンからの引用については、この版に従い、本文引用末尾にページ数のみ付す。訳は筆者による。なお、翻訳に際しては、次の翻訳を参考にさせて頂いた。『完訳 グリム童話集』(全7巻)、野村法訳、第2巻、72-91ページ参照。

¹⁰ 石井慎二編『夢の本』JICC出版局、1982年、25ページ参照。

¹¹ 童話において「旅に出ること」は、一般に「自己実現への意思」を象徴的に示している(vgl. Beit, Hedwig von: *Symbolik des Märchens*. Francke. Bern und München 1971, S. 40)。

ら金の毛を三本取ってこなくてはならん。もし、おまえがわしの要求するものを持ってくるなら、娘はおまえのものとしよう。」(S.170)

福の子の方は、この試練を一向に心配もせず、気軽に遍歴の旅に出ることを王に約束する。旅を続けると福の子は、やがてとある大きな町に出る。すると福の子は、その門番に、次のような難問の解決を求められる。

「私たちの市場の井戸から、以前はブドウ酒がわき出ていたのですが、それが涸れてしまって、今ではもう水ですら出なくなったのですが、なぜでしょうか？」(S.170)

この難問に福の子は、いともたやすく「教えてあげましょう。ただし、私が戻ってくるまで待っていてください」(S.170)と答えるのである。

こうして福の子が旅を続けると、別の町にやってくる。すると、その町の門番も福の子に同じように、次のような難問の解決を求める。

「それでは一つお願いがあるのですが、私たちの町には木が一本あって、以前には金のリングがなっていたのですが、今ではもう葉一枚生えなくなったのですが、なぜでしょうか？」(S.170)

ここでも福の子は、前回同様、「教えてあげましょう。ただし、私が戻ってくるまで待っていてください」(S.170)と答えて、旅を続ける。最後に福の子は、大きな川に出る。そこで福の子は、その川の渡し守に3度目に次のような難問の解決を求められる。

「私は、いつもこの川を行ったり、きたりしなければならず、まったく代わってもらえないのですが、なぜでしょうか？」(S.170)

3度目に福の子は、「教えてあげましょう。ただし、私が戻ってくるまで待っていてください」(S.170)と答えて、旅を続ける。典型的な童話に見られる三進法が、¹²ここでも用いられている。川を渡ると福の子は、ようよう地獄の入口にたどり着く。ところが、悪魔の住処にはお婆さんしかおらず、このお婆さんは悪人には見えなかったので、福の子は、はっきりとお婆さんに、「悪魔の頭に生えている金の毛を三本欲しいのです」(S.171)と、自分の本心を告げる。すると、奇妙なことにこのお婆さんは、福の子の告げた願望が、途轍もない難題だと思われるにもかかわらず、すぐさま福の子に援助の手を差し伸べる。こうしてお婆さんは、福の子をアリに変えて、自分のスカートの襷の中へもぐりこませるのである。

¹² 拙著『童話を読み解く』同学社、2008年、358-361ページ参照。

さて、晩になると悪魔が家へ帰ってくる。悪魔は、家の中に人の肉の臭いがすると言って、家中を探す。しかしお婆さんは、人の肉ばかりを捜し求める悪魔を叱り飛ばして、晩ごはんを食べさせる。悪魔は、食べて飲むと、疲れが出て、お婆さんの膝に頭を載せて、シラミを取ってくれとお婆さんに頼む (vgl. S. 171)。まもなく悪魔は眠り込んで、ラッパのようないびきをかき始める。するとお婆さんは、悪魔の頭から金の毛を1本引っこ抜く。悪魔は大声を上げて、お婆さんにその行為に及んだ理由を詰問する。これに対してお婆さんは、「わたしゃ、重苦しい夢を見たんじゃよ。それでおまえの髪の毛をつかんだのじゃよ」(S. 172)と応える。すると好奇心の強い悪魔は、怒りも忘れて、次のようなお婆さんの夢の中味を訊く。

「わしの見た夢はな、市場の井戸がの、以前にはブドウ酒がわき出ていたんじゃが、涸れてしまっとな、今では水すら出んのじゃよ、どうしたわけじゃろな？」(S. 172)

お婆さんの夢の内容を聞くと、悪魔は即座に「ふん、あいつらには分からんよ！」(S.172)と応える。そして悪魔は、町の人々を軽蔑し、次のような謎の答えをお婆さんに教えるのである。

「井戸の石の下にヒキガエルがいるのさ。そいつを殺せば、ブドウ酒はすぐにまた出てくるよ。」(S. 172)

その後お婆さんが再び悪魔のシラミを取っていると悪魔は、眠り込んで、前よりもいっそう大きいいびきをかき始める。すると、またしてもお婆さんは、悪魔の頭から2本目の金の毛を引っこ抜く。そこで悪魔は、いっそうけたたましい叫びを上げ、お婆さんを叱り飛ばす。しかし、お婆さんは、夢の中でしたことだから許してくれと言うと、悪魔は、今度も募る好奇心の誘惑に負けて、お婆さんの夢の内容を訊ねる。お婆さんは、「わしが見た夢はな、とある王さまの国に果物の木があつての、以前には金のリングがなっていたんじゃが、今では葉っぱ一枚生えんのじゃ、どうしたわけじゃろな？」と話す。これに対して悪魔は、前回同様、「ふん、あいつらには分からんよ！」と町の人々を軽蔑し、続いて「木の根っこをネズミがかじっているのよ。そいつを殺せば、すぐにまたリングがなるさ。だがな、もしネズミがもうしばらくかじっていると、木はすっかり枯れちまうぜ。なあ、婆さんの夢なんか、どうでもええ。もう一回眠るのを邪魔したら、はっ倒すぞ」と謎の答えを告げる。悪魔とて、頭に生えている金の毛を抜かれることは、相当の苦痛を伴うと思われる。3度目に眠りを邪魔したら、お婆さんを張り倒すと言うほどまでに怒り狂ってしまっている。にもかかわらずお婆さんは、悪魔のシラミを取り、悪魔がまた眠り込むと、3度目に金の毛を引っこ抜く。悪魔は、飛びあがって目を覚ますと、お婆さんを懲らしめようとするが、お婆さんの「ものすごく悪い夢じゃったよ！」(S. 172)という返事に氣勢をそがれ、またしても好奇心に負け、痛みも忘れ、お婆さんの見た夢の内容を知りたくなってしまう。お婆さんの「渡し守の夢を見たんじゃが、渡し守は不平をこぼしているんじゃよ。いつも川を行ったりきたりで、代わってもらえないってな。どうしたわけじゃろな？」(S. 172)という夢の謎を聞くと悪魔は、3度目に「ふん、間抜けめ！」と渡

し守を軽蔑し、同じように「だれかがきて、川を渡ろうとしたら、そいつの手にさおを握らせればいいのさ。そうすりゃ、そいつが渡し守になり、自分はお役目ごめんというわけだ」と、謎の答えをお婆さんに教える。こうして最終的に福の子は、お婆さんの援助により、王から課せられた3つの難問の答えを手に入れてしまうのである。読者の印象として、福の子は、決して努力をしているとは考えられない。むしろお婆さんが、なぜ相当の身の危険を覚悟の上で福の子を助けるのかを読者は訝しく思うことであろう。従って、この局面を考察した方が得策であると思われる。

3つの難問の答えを手に入れた福の子は、旅の帰途、今度は逆の手順で、第1と第2の謎をかけた門番に、それぞれの答えを告げる。その度にお礼として福の子は、「金を積んだロバを二頭」(S. 173)を門番たちからもらう。これによって福の子は、王の富にも勝る莫大な富を手に入れる。福の子が城にいる姫の元に辿り着くと、「貪欲な」王は、その莫大な金に心を奪われ、自分でも金を手に入れたいと思い、福の子にその方法を訊ねる。教えた通りに行って川に辿り着いた王は、渡し守に向こう岸に渡してもらうが、しかし、福の子から謎の答えを聞いていた渡し守は、王を向こう岸に渡すと、王の手に棹を握らせる。それで王は、「自分の犯した悪業の罰があたって、そのときから渡し守をつとめなければなら」(S. 174)なくなるのである。

3. 7つの疑問

このような『金の毛が三本ある悪魔』の物語の展開を考察してみると、主として次の疑問が浮上してくる。

1. 通常、人格の完成者と見なされる王が、なぜこのように「貪欲」な人間として描写されているのか？
2. なぜ、お婆さんは、これほどまでに無条件に福の子を助けるのか？
3. 一般に「悪・悪党」と見なされる登場人物たち（盗賊の首領、悪魔）が、なぜ福の子を助けるのか？
4. なぜ悪魔は、「ふん、あいつらには分かんよ！」と言って、町の人々を軽蔑するのか？
5. 「市場の井戸から湧き出ているブドウ酒」とは、一体なにを意味しているのか？ そして、それが無くなると、町の人々は、なぜ困るのか？
6. 「町のリンゴの木になる金のリンゴ」とは何を意味するのか？ そして、それが無くなると、町の人々はなぜ困るのか？
7. 渡し守は、なぜ交替を欲するのか？

これらの疑問が、順次以下において解明されなければならない。さもなければ、盗賊の首領が福の子に同情を示すこと、福の子がお婆さんの助けによって悪魔の金の毛を3本首尾よく手に入れること、3つの難問を難なく解くこと、福の子のハッピー・エンドといった童話の感動も、不可解で、無意味なものとなってしまうであろう。福の子とは、言うまでもなく神の祝福を受けた子どものことである。とはいえ、福の子があらゆる難事に際して、努力せずとも救済されると決まっているわ

けではない。やはり、人間の子として、最大50パーセントの努力は求められると言わねばならない。50パーセントの努力で人生は大きく変わるのである。通常、人間は、50パーセントの努力を求められるのであるが、この物語における福の子の努力は、かなりお婆さんの援助によって補足されている。

王が嘘をつき、「貪欲」な人間であることは、すでに物語の中で語られている。とはいえ、童話において登場人物の内面が客観的に語られるという童話に固有の描写方法を考慮に入れると、¹³この王の心の貧困は、物語の中で実際客観的に描写されているとも考えられる。つまり、福の子が最初に入る町では、門番が語るように、町の市場の井戸からブドウ酒が湧き出なくなっている。さらに、福の子が2回目に入る町では、町にあるリンゴの木になっていた金のリンゴが実らなくなってしまう。確かに、この2つの町が王の統治する領土内に属しているとは語られていない。しかしながら、この災いが一見王の心の貧困とは無関係のように見えながら、実は王の一連の「不実な心」がもたらした結果であると解釈することも十分可能である。悪魔のお婆さんが、福の子に代わって悪魔に謎の答えを訊いたとき悪魔は、3回にもわたって、「ふん、あいつらには分かんよ!」と言って、町の人々を軽蔑している。この「あいつら」には、町の人々ばかりではなく、王も含まれていると考えられる。¹⁴

ブドウ酒は、そのイメージとシンボルによれば、「生命の水」であり、具体的には「血」と「聖餐」(IS692)を暗示している。福の子が最初に入った町の井戸からブドウ酒が湧き出なくなったという事態は、この町から「血」と「聖餐」による恵みがなくなり、その結果、「生命の水」、すなわち人生の活力がなくなったことを暗示している。換言すれば、この町の人々から創造力が枯渇し始めたことを指し示している。たとえ王が、当初分別のある統治をしたとしても、その時点の合理は、時代の流れとともに理にかなわないものとなってしまっている可能性がある。合理は、常に時の流れとともに、理にかなわないものとなり、過剰な合理に陥る危険性を内包しているのである。

福の子が2番目に入った町では、リンゴの木に金のリンゴがなくなったという。金のリンゴは、そのイメージとシンボルによれば、「知恵と認識」であり、究極的には「叡智」(vgl. IS22-24)を暗示している。この金のリンゴがなくなったという事態は、この町の人々から「知恵と認識」が失われ始めたことを指し示している。この「知恵と認識」に関わる重大事項は、「善悪の判断」であるゆえに、この「知恵と認識」が失われるとすれば、そのような人々の住む町は、悪の支配する町となって、道徳的に荒廃した町となるであろう。

福の子が地獄へ渡る川のところで出会う渡し守が3度目に頼む謎は、川のイメージとシンボルから考察すると、「ハデス(冥界)の川」(IS527)に関連している。この川は、この世とあの世の境界である。この関連においてこの川は、この物語においては意識と無意識との境界をも同時に指し示していると思われる。¹⁵この川を渡って福の子は、地獄に住む悪魔から3つの謎に対する答えを

¹³ ブルーノ・ベッテルハイムは、このことを「外面化」と呼んでいる(『昔話の魔力』波多野完治/乾侑美子訳、評論社、1987年、91-97ページ参照)。

¹⁴ M.-L. フォン・フランツの言うように、単に主人公ばかりではなく、登場人物はすべて、「無意識が産み出した象徴的心像である」と考えられる(フランツ、M.-L. フォン『メルヘンと女性心理』秋山さと子・野村美紀子訳、海鳴社、1984年、14-15ページ参照)。

¹⁵ 河合隼雄は、「他界」を「無意識」の世界と捉えている(河合隼雄「浦島と乙姫」、『母性社会日本の病理』所収、中央公論社、1987年、231-237ページ参照)。

この世へ、すなわち意識の世界へもたらすのである。この解明によって町の人々は、「生命」と「知恵と認識」を取り戻すのであるから、福の子は、人類に火をもたらししたプロメテウスのように、この世へ大変な宝をもたらしと言える。事実、この物語においても福の子は、謎を解いたお礼として、最終的には金を積んだロバを4頭手に入れることとなる。

福の子は、その名の通り、「幸福を授かる子」であるから、彼の進む先には不幸が訪れるはずはない。しかし、それにしても、この童話において、盗賊の住処におけるお婆さんと悪魔の住処におけるお婆さんという具合に、お婆さんが無条件に福の子を助けるのは、どのような理由からであろうか。まず考慮に入れなければならない点は、お婆さんといえども、グレート・マザー、すなわち「地母神として天上的性格と地界的性格を仲介する。現在として過去を未来につなぐ」¹⁶イメージを持っているということである。さらに、ここで一層大きな手掛かりになるのは、『赤ずきん』（KHM 26）に登場するお婆さんの孫娘に対する無条件の愛情である。その愛情を筆者は、「閉経になった祖母の、これから初潮を迎える赤ずきんへの女の命の継承」と解釈したのであった。¹⁷この解釈を参考にすると、お婆さんと孫息子との人間関係の解釈に関する糸口が得られそうである。その前にまず、「息子と母親・父親」、さらに「娘と母親・父親」の人間関係は、いわゆるエディプス・コンプレックスによって、かなり性的エネルギーに支配されていることを確認しておかなければならない。それゆえ、そこには「無条件の好意」が生まれることは稀であると言わざるをえない。これに反し、「祖母と孫息子」「祖父と孫娘」の人間関係は、年齢が一世代離れているゆえに、性的エネルギーによって拘束されることは、まずないと考えられる。その証拠に、悪魔の住処でお婆さんは、福の子をアリに変え、自分のスカートの襷にもぐりこませるのである。母親では、このような行為は、やはり憚られるであろう。

加えて、ここでは「アリ」のイメージとシンボルを探求する必要がある。というのも、福の子が悪魔のお婆さんのスカートの襷にもぐりこむのであれば、人間との関係がさらに密接な「ノミ」や「シラミ」の方が、いっそう適切なようにも思われる。実際、そのイメージとシンボルから探れば、「ノミ」は、主として1. 奇食者、2. ペスト、3. 戦うに値しない敵、を象徴的に表している（IS251）。また「シラミ」は、「人間にはきわめて親密な動物で、愛を意味している」（IS408）と言われる。確かに、ノミやシラミでも、一見差し支えないように思われるのであるが、しかし福の子が、お婆さんから見て孫息子の関係を持っているという局面を考慮に入れると、「奇食者」ないし「病気の媒介物」という意味合いは、物語の展開上、好ましい動物であるとは見なされない。他方、「アリ」のイメージとシンボルを探ってみると、これは主として、1. 勤勉を表す、2. 知恵、思慮分別、用心、知性、秩序を表す、3. 意思疎通を表す、4. 慎み深さと謙譲を表す、と言われる（IS19-20）。「アリ」の持つこれらのイメージとシンボルを吟味してみると、「ノミ」や「シラミ」以上に、登場人物と物語の展開に適切であると首肯される。とりわけ、「知恵、思慮分別、用心、知性」は、福の子の福の子たる所以を説明している。福の子は、神の祝福を受け、成長するに及んで、これらの仁徳を身につけたと考えられる。さらに、3の「意思疎通を表す」というイメージも看過されては

¹⁶ ビルクホイザー-オエリ、ジビュレ『おとぎ話における母』氏原寛訳、人文書院、1987年、315ページ。

¹⁷ 拙著『童話を読み解く——ホフマンの創作童話とグリム兄弟の民俗童話』同学社、1999年、371-391ページ参照。

ならない。福の子が、悪魔のお婆さんと、たちまちのうちに愛顧を得、親しくなれたのも、ひとえにこの能力によるものと解釈される。

次に、なぜ一般に「悪・悪党」と見なされる登場人物たち（盗賊の首領、悪魔）が、福の子を助けるのかという疑問を解明しなければならない。盗賊の首領が王の手紙を書き変えたのは、福の子の持つ「意思疎通」の力のせいもあるが、主として福の子への同情からである。この行為は、悪党でも「良心のかげら」は持っているということの証左でもある。しかし、盗賊たちが住处とする所は、王の国の中にありながら、その国の権力に支配されない場所にあると考えられる。盗賊たちは、いわゆるアウトサイダーであり、王国の法律に反した生き方をしている。王国の法律が不合理になり始めているとすれば、むしろ盗賊たちの論理の方が、国の間違いを正すという可能性も出てくる。

他方、悪魔は3つの謎の答えをお婆さんに告げるのであるが、とはいえ決して福の子を直接助けるわけではない。お婆さんが、その孫と推定される悪魔から謎の答えを引き出して、スカートの襷にもぐりこんでいる福の子に聞かせているだけである。もし、悪魔が福の子を発見するとすれば、おそらく悪魔は、謎の答えを教えてくれるどころか、福の子を食べてしまったに違いない。悪魔は、福の子といえども、彼には好意を示すことはないであろう。この悪魔は、地獄、すなわち無意識の中に住んでいるので、その考えていることは、意識の世界に住む町の人々や王には察知されない。しかし逆に悪魔は、意識の世界に住む町の人々や王の考えは自在に察知することができる。それは、ちょうど解離性同一性障害の問題において、無意識の中に潜在するイヴ・ブラックが、意識の中で自意識を持って生活しているイヴ・ホワイトの考えを、すべて見通すことができるのと事情は同じである。¹⁸

1957年にセグベンとクレックレーは、『私という他人——多重人格の病理』¹⁹と題する著書をアメリカで発表した。この2人の心理学者は、この著書の中で、モートン・プリンスが扱ったビーチャム・ケースにおける分析結果を踏まえ、彼が冒したような、医師としての慎重さを欠く処置を防ぐという配慮の下に、読者から見れば厳格とすら言えるような態度を終始一貫して取り続けている。さらにこの2人は、S.フロイトの精神分析やC. G. ユングの深層心理学による理論を尊重してはいるものの、しかし、自分たちの解釈が独断と偏見に陥ることを恐れ、これらの理論に基づく解釈を結論として提出することは、敢えて避けている。両心理学者は、解釈というよりは、膨大なデータの収集に基づき、実証的な推論を導き出そうとして、極めて慎重に分析を進めている。

一般に医者は、その病気の源となっている身体の部分を外科手術によって摘出するか、あるいは薬物によって抑えることができるであろう。しかし、その病気の原因が心的なものである場合には、やはり対話を通じ、その病気の源を言葉のリズムによって探り当て、これを意識化するしか方法はない。とはいえその場合、意識化という作用は、ちょうど癌細胞にレーザー光線を照射することによってその癌細胞を治癒するのと同様、意識のもつ強力な光によって心の傷を治癒しうるのである。このことを明確に体系化して提示したのは、なんといってもフロイトであったと言わねばならない。

美しい顔立ちで、清楚ではあるが、しかし、全く生彩のない25歳の女性が、「目もくらむような」(13

¹⁸ 拙著『悪魔の霊液——文学に見られる自己の分裂と統合』同学社、1997年、205-222ページ参照。

¹⁹ セグベン、C. H. / クレックレー、H. M. 『私という他人——多重人格の病理』川口正吉訳、講談社、1984年。以下、この文献からの引用については、引用末尾にページ数のみを付する。

ページ) 頭痛を覚えるといって医師を訪ねてきた。一見して普通の患者かと思われたこのイヴ・ホワイトと名乗る女性が、実は多重人格の持ち主であった。やがて、この女性からイヴ・ブラックと名乗る別の人格が出現し、さらには、この両者の中間項と呼びうるジェーンが、そして最後に、この三者を統合した支配的人格であるエヴリンが出現することによって、この多重人格の病気は一応の決着をみることになる。

第3の人格であるジェーンは2人のイヴの中間物のような存在であるとはいえ、浅薄で不完全という印象が強いブラックとも、また、情感のたくましさや欠如しているホワイトとも異質な人格を持ち、この意味においては3人の中で最も強い生命力と現実適応能力を感じさせる。当初ジェーンは、2人のイヴの知識と記憶に直接近づくことはできなかった。しかし、その後2人のイヴが記憶を想起する度に、これを自分のものとして習得することができたのである。しかも、ジェーンにはブラックが考えている内容も分かり、加えてそのことをブラックに気づかれずにいることさえできたのである。このジェーンが存在は、ブラックにとっては大いなる脅威とならざるをえなかった。ただし、ジェーンはホワイトからしか出現することができなかった。このことは、ジェーンが意識のレベルにおいてホワイトの方に近いということを裏付けるものであろう。これを証明するかのように、脳波記録機によって心身の平静を示すアルファ波を測定すると、ホワイトとジェーンが同じ毎秒10½サイクルを示すのに反して、ブラックは正常の上限である12½サイクルを示したのであった。

興味深いことに、この記憶回復の時期に際し、ジェーンが数度に亘って、自分が蛇に変わる夢を見ている。この変身の夢は、深層心理学的ないし象徴学的立場から見て、非常に示唆に富む出来事と言わざるをえない。というのも、深層心理学的に見れば、蛇は無意識のエネルギーを表し、また蛇は、「脱皮をするところから、死と再生にかかわる象徴であり」、さらに、「自分の尾をのみこみながら永遠に円を描き続けている尾をくわえた蛇は、ウロボロスとよばれて、永遠の時間と原初の混沌をあらわすもの」²⁰と解釈されるからである。同様に、象徴学的に見ても、蛇は原初の宇宙の力・無意識・生命力・治癒力・再生を意味しているからである。²¹

このように考察すると、井戸の石の下にいてブドウ酒が湧き出すのを妨げていたヒキガエルと、金のリングがなる木の根っこをかじっているネズミは、悪魔の手下であって、ヒキガエルとネズミは、悪魔の命令を受けて行動していたとも考えられるのである。

4. 無意識における宝

ここに至ると、前述した『金の毛が三本ある悪魔』と『フェニックス鳥』とにおける項目4の「ブドウ酒と水」、項目5の「リングの木とイチジクの木」、項目7の「お婆さんと女房」という食い違いは、ボルテとポリーフカが言うように「わずかな食い違い」でないことが判明する。これと同時に、グリム兄弟が第2版において『フェニックス鳥』の代わりに『金の毛が三本ある悪魔』を収録した理由が十分に理解されるであろう。そして、グリム兄弟の選択は正しかったと筆者も認める。

²⁰ 『夢の本』、別冊・宝島15、JICC出版局、1979年、45ページ。

²¹ フリース、アト・ド『イメージ・シンボル事典』山下主一郎他訳、大修館書店、1988年、562-568ページ参照。

このことは、『金の毛が三本ある悪魔』におけるイメージとシンボルの解釈によっても明らかである。いよいよ、町の人々、ひいては王の心の貧困を象徴的に示している難題を、大胆に解釈する準備が整ってきたと思われる。最初の謎の答えは、「ブドウ酒が湧き出ている井戸の石の下にヒキガエルがいるので、これを殺せば、ブドウ酒が再び湧き出る」というものである。単なる「カエル」のシンボルは、一般に「豊穡」(vgl. IS267-269)を暗示している。このシンボルの意味内容は、『蛙の王さま』(KHM 1)にも当てはまる。²²ただし、蛙が「ヒキガエル」となると、話はおおいに変わってくる。蛙は、おおむね肯定的な意味内容を持っているが、これに反してヒキガエルは、「(豊穡の)カエルの有する価値が逆転する」(IS643)と言われる。それどころかヒキガエルは、「悪魔」(IS643)を表し、「魔女」や「悪徳」をすら表していると言われる。まさしく、悪魔の手下というにふさわしいシンボルである。

第2の謎の答えは、「金のリングがなる木の根っこをネズミがかじっているので、そのネズミを殺せば、また金のリングがなる」というものである。「ネズミ」は、ハツカネズミの場合、そのイメージとシンボルは、「悪魔」「虚栄」「貧困」「乱雑、狂乱」(IS443-444)などを指し示している。これらのイメージは、悪魔を初めとし、王や町の人々に、多かれ少なかれ当てはまるものと言えよう。このようにネズミそれ自体も、否定的なイメージを持っているのであるが、これがハツカネズミより大きな「(ドブ)ネズミ」となると、さらに悪い「破壊および疾病」「復讐」(vgl. IS518)などのイメージを持っている。このネズミも悪魔の手下だとすれば、「破壊および疾病」を町の人々にもたらし、特段奇妙とも思われないが、しかし、もしネズミが「復讐」をも指し示しているとなれば、悪魔は町の人々と王に、どんな復讐の動機を持っているというのであろうか。

ゲーテの『ファウスト』に登場する、いささかなりとも高級な悪魔メフストーフェレスは、人間の魂を糧にして生きると言われるが、『金の毛が三本ある悪魔』に登場する悪魔は、人間の魂ではなく、人間の肉を求めている。この意味においてこの悪魔は、それほど高級な悪魔ではないと見なされる。このような低級な悪魔であれば、ドブネズミやヒキガエルを手下にしても納得のゆくところである。お婆さんが悪魔の金の毛を三度にわたって引き抜くたびに、悪魔が「ふん、あいつらには分かんよ!」と言って、町の人々を軽蔑する場面から判断すると、秩序立った意識の世界(王国の法律)に反感を抱いているように見える。おそらく、悪魔にしても、盗賊の首領にしても、その両親ではなく、お婆さんといっしょに暮らしている点を考慮に入れると、この両者は、既存の制度ないし秩序に反感を持つ、生まれつきのアウトサイダーという印象を与える。この種の人間は、とにかく自己主張が強く、両親の行動規範を模倣して成長したにも関わらず、自我を確立してから、両親の意見にすら従うことを嫌悪する。彼らは、両親と同居はできず、かろうじて自分の願望を無条件に受け入れてくれる「お婆さん」としか暮らすことができないのである。

悪魔は、ドブネズミを使って、まずは人間界における「知恵と認識」、すなわち「善悪を判断する能力」を奪い、人間界に「虚栄」「貧困」「乱雑、狂乱」をもたらす。そのうえで、ヒキガエルを使って、「ブドウ酒」が象徴的に示している「英知」と「永遠の人生」を奪う。それによって悪魔は、人間界に不幸と戦争を引き起こし、あわよくば人間の魂を奪い、死後地獄に堕ちる人々を増やそう

²² 拙著『童話を読み解く』、前掲書、321-336ページ参照。

と狙っている。悪魔と盗賊の首領が抱いている「復讐」の核心は、「自分に愛情を注いでくれない両親への恨み」であると推定される。²³

悪魔と盗賊の首領には、お婆さんが付き添っている。しかし王には、妃と娘がいるものの、祖母はいない。王には、自分に無条件に愛情を注いでくれる祖母がいないのである。その愛情の欠乏から王は、貪欲で、平気で嘘をつく人間に育ったのかも知れない。一般に、両親からの愛情は、子どもにとって不可欠のものであるが、以上のような考察を踏まえると、人間は誰しも、幼児期において、母親から「無条件の愛情」を注がれる時期を必要としていると結論づけられる。

最後に、王に下った罰について考察を試みなければならない。福の子が城へ莫大な金を持ち帰ると貪欲な王は、もっとたくさんの金が欲しくなる。大きな川の向こうの岸辺には金が散らばっていて、それは取り放題だと聞くと王は、早速そこへ出かける。王が向こう岸に渡ると、渡し守に棹を渡され、王はそれ以降ずっと棹をもち、渡し守を続けねばならない羽目となる。棹は船の「舵」を取るものであり、これは象徴的には「操縦、案内、権威、慎重さ、英知、安全」(IS537)などを暗示している。さらに、このイメージを宇宙的に拡大すれば、「宇宙の案内人である神の意志」(IS537)を表している。最後に棹を握った王が「神の意志」を保持しているわけではない。むしろ王は、棹を握り続けることによって「神の意志」を突き止めなければならないのである。この「神の意志」とは、果たしてなんだろうか？

王が渡った川は、「渡し場」であり、これは「意識と無意識の境界線」(IS259)を指し示している。川の向こう側には無意識の世界があり、そこには悪魔が棲んでいる。悪魔は、人間の肉を喰う恐ろしい魔物であるが、しかし、その毒性は人間界の病気を治す力を持っている。また、福の子が実際に手に入れたように、悪魔の答え、あるいは教えは、意識の世界へ持ち込むと、莫大な宝にも相当するほどの価値を持っている。王は、金よりも、むしろ「三本の金の毛」が象徴的に暗示している無意識の力(宝)を手に入れなければならなかったのである。童話の世界が一次元的に描写される点を考慮に入ると、²⁴「三本の金の毛」は、実質的には福の子が課せられた難題の回答、すなわち1. 渡し守の仕事を交替してもらう方法、2. 木に元通りに金のリングをならせる方法、3. 井戸に元通りにブドウ酒を湧き出させる方法を指していたと考えられる。これら3つの答えを、イメージとシンボルによって解釈すると、それらはそれぞれ「無意識を意識化する方法」、「知恵と認識」、「英知と永遠の人生」を暗示している。このように解釈すると、「三本の金の毛」は、福の子が最終的に獲得した「金を積んだ口バ4頭」より、はるかに価値のあるものとなることが分かる。

やはり王は、自分が福の子に試練として課し、見事福の子が地獄から持ち帰った「悪魔の三本の金の毛」の価値を認識しなければならなかったのである。しかしながら貪欲な王は、物欲に目が眩んで、もっと多くの金を手に入れようと欲する。悪魔の金の毛3本の保持にこそ、神の意思があったことが解釈から導き出される。この価値を見抜く力がなかったところに、王がその後天罰を受けることとなる理由がある。福の子は、悪魔の3本の金の毛を難なく手に入れたのであった。それというのも、福の子にはお婆さんからの無条件の援助(愛情)が差し伸べられたからである。福の子を

²³ 愛する母親が自分に愛情を注いでくれない場合、その母親への愛が最後には憎悪に変わることがある(『昔話の魔力』、前掲書、「漁師と魔神」、50-57ページ参照)。

²⁴ 小澤俊夫(編著)『昔話入門』ぎょうせい、1998年、84-85ページ参照。

初めとし、盗賊の首領、そして悪魔が受けたお婆さんからの無条件の愛情を、唯一この物語で受けていないのは王である。この意味において、この童話において最も憐れむべき人物は王であるかも知れない。こうして王には、意識（現実）から無意識（地獄）へと冒険をする者を渡し、無意識界の宝を意識界へ持ち帰ろうとする者を渡すという、換言すれば「無意識の意識化」という試練がかけられるのである。

王は、福の子から「三本の金の毛」を受け取る。髪の毛は、そもそも「活力」と「魔力」、「霊力」(IS304)を象徴的に示している。『旧約聖書』に登場するサムソンは、その長髪に怪力の秘密があることを巫女のデリラに漏らしたために、長髪を切られて怪力を失い、ペリシテ人に捕えられてしまったのであった。²⁵さらに「金の毛」は、「太陽光線」(IS306)を象徴的に示している。このことから王は、町の人々全員から仰ぎ見られる「太陽王」になろうと欲していたのかも知れない。それもすべて、両親からの愛情が不足していたことと、祖母から「無条件の愛情を注がれなかった」ことから発していると考えられる。この「三本の金の毛」は、もともと悪魔の頭に生えていたものである。そのことから推察すると、悪魔こそ、「太陽王」²⁶になろうという願望を宿していたのかも知れない。²⁷地獄の闇の世界に住む悪魔が、その対立する地上にある光の世界を支配しようと思うのも十分納得ゆくことである。プラスはマイナスを求め、男性は女性を求める。同様に、非現実の夢の世界は、現実の行為の世界において具現化されることを求める。対極的な両世界は、表裏一体のものであり、相互に補完作用を持っているとも言える。²⁸同毒療法の発想を採って、徹底的に悪を突き詰めれば、地獄の彼岸に太陽が見えてくるという逆説も、決してありえないことではない。

無意識の世界の宝は、ときとしてカモフラージュされ、夢となって意識の世界へもたらされる。これは、冥府に関する稀有な体験が美的経験を通じて文学として形象化される過程に似ている。実際、ファウストは、冥界の女王に頼んで、ヘーレナに会わせてもらう。ファウストとヘーレナとの結婚からオイフォーリオンという美しい子どもが生まれる。しかし、このオイフォーリオンが、成長するに及んで、ギリシアの独立戦争に参加するために空へ飛び立つが、墜落して死ぬ。死んだオイフォーリオンを追って、ヘーレナは冥界に去ることとなる。²⁹このように辛い経験を通じてファウストは、現世の古い価値観を乗り越えて、新たな価値観を獲得する。同様にグリム童話にも、現世から冥府へ下降し、そこで反転して冥府から現世へという「V字プロセス」³⁰が見られる。冥府は、往々にして森や洞窟、湖といった無意識を暗示する場に置き換えられる。しかしながら、いずれに

²⁵ 旧約聖書「士師記 13.1-16.31」、『聖書 新共同訳』日本聖書協会、2007年、(旧) 404-411ページ参照。

²⁶ ランク、オットー『英雄誕生の神話』野田俣訳、人文書院、1986年、102-111ページ参照。アニムスは、その闇の側面を発揮すると、鬼にもなりうる。また、アニマは、般若にもなりうる。アニムスもアニマも、共に明と暗のイメージをもっている（ヤコビー、ヨランダ『ユングの心理学』高橋義孝監修、池田紘一・石田行仁・中谷朝之・百瀬三郎共訳、日本教文社、1980年、2-3ページ参照）。

²⁷ この悪魔を「無意識のイメージを持つ人物像」と把握すると、悪魔の頭に生える3本の金の毛こそ、意識界へもたらした場合、宝と見なしうるものであろう。悪魔の夢である「太陽王」は、悪魔（無意識）の心的過程の表出でもある（河合隼雄「昔話の心理学的研究」、『メルヘンの心理学』[現代のエスプリ]所収、至文堂、1988年、32-37ページ参照）。

²⁸ ベッテルハイムは、夢に関し「最近の夢の研究では、夢を見ることを禁じられた人は、睡眠そのものを禁じられなくても、現実に対処する能力が低下することがわかってきた。そういう人は、情緒も不安定になる。これは、その人を苦しめている無意識的な問題を、夢の中で解決することができないからだ」と述べている（ベッテルハイム、ブルーノ『昔話の魔力』、前掲書、92ページ）。

²⁹ ゲーテ『ファウスト』高橋義孝訳、グラフ社、1979年、519-611ページ参照。柴田翔『「ファウスト第Ⅱ部」を読む』白水社、1998年、122-156ページ参照。

³⁰ 高橋吉史『グリム童話——冥府への旅』白水社、1996年、106-134ページ参照。

しても主人公が冥府・無意識へと下降して、そこから上昇してくると、主人公は新たな価値観を獲得しているのである。

無意識の世界の論理は、これを意識の世界に持って帰るとき、貴重な宝に変わる。『白雪姫』(KHM 53)の主人公は、森の小人たちのもとで家政に関する知恵を学ぶことによって王子と結婚し、また『イバラ姫』(KHM 50)の主人公も、百年の眠りを体験することで性の意味を理解し、王子と結婚する。さらに『赤ずきん』(KHM 26)の主人公も、オオカミに食べられ、その腹の中で死を体験し、その後再生することで、人生の大切な教訓を修得する。日本においても、有名な昔話『桃太郎』の主人公は、周知のように、鬼ヶ島から沢山の宝を持ち帰る。³¹

人類の夢を物語として形象化した童話の中には、人類の「素朴な道徳」³²、すなわち諸民族の知恵が隠されている。その知恵は、解釈によって分節化され、理解されるとき、人類に大きな宝をもたらすであろう。その宝を有効に利用するとき、そこに人類の幸せなユートピアが拓けてくるのである。

³¹ 柳田國男『桃太郎の誕生』三省堂、1933年、1-56ページ参照。

³² Vgl. Jolles, André: *Einfache Formen. Legende, Sage, Mythe, Rätsel, Spruch, Kasus, Memorabile, Märchen, Witz*. Max Niemeyer. Tübingen 1972, S. 240ff.